

私の苦い思ふ由

「子どもに寄り添ひ」と「いじり」ができなかった自分

加印いろえんぴつ 岸本ひとみ

今もし、教員生活の中で、あの日に戻れるならと言われたら、間違いなく教員2年目と答えます。新卒で3年生、2年目で6年生を担任することになった、小生意気な教師でした。

42人のクラスで、児童会担当も努め、大好きな社会科の歴史を教えることもでき、充実した1年だったので、子どもたちに対しては、優しくない教師だったと思います。宿題ができない子どもを放課後残して、できるまでやらせたり、組体操の倒立ができなかったら、特訓したりと、けっこう荒業を平気でやっていました。もともと、周りの先生方もそれが当たり前の空気でした。・・・。

中で、どうしても筆算のわり算ができないYさんという子どもがいました。6年生で、÷2桁ができないのでは、小教計算なんてとても無理ですし、算数の時間には全

くお客さん状態でした。周りの子どもたちも、「先生、あの子は3年生の時からあんなやで。」と、そっとしておく雰囲気ができあがっていました。今でいうネグレクトのお子さんだったのです。

幸運なことに、初任の年に、岸本裕史さんの話を聞き、この年には、藤原義隆さんとのW講演を聞くという機会に恵まれていたので、その頃には、もうすでに100マス計算の実践を始めていました。当然いきなり100マスを与えて、どんどんやらせました。当時は、1万題を超えれば瞬時に答えが出せるようになる、と子どもに負荷をかけても平気だったのです。Yさんはいくと、かけ算は678の段があやふや、引き算も間違いだらけという状態でした。

今なら、実態調査をして、Yさんのような子どもがいたら、問題数を減らし、九九カードを使って丁寧に練習をする、という

さかのぼり指導をしてから、徐々に50マス計算程度から始めるようにしたと思います。周りの子どもたちは、6年生ですから、次々に3分を切り、2分そこで終わっていくのを見ている時の、無表情を装っているYさんの心の中は、いったいどうだっただろうと思うと、今でも心がずきずきします。

それなのに、宿題としても1枚ずつプリントを渡していたのですから、ありえない指導をしていたことになりません。当然、できないままに持つて来ないという日々が続きます。できないいけないから、できないから持つてきたくなかったのでしょうか。家庭問をしても、連絡ノートに書いても、一向に状態は改善されませんでした。Yさんはひとりっ子で、ご両親は年配の方でした。遅く生まれた我が子がかわいくて仕方ないという様子で、いつもニコニコとしておられました。私には、その様子が甘やかしているように見えたのです。私にも少し洞察力があれば、ご両親が識字に課題を持つておられることがわかっていただいでしょうに、まったく気がつかなかったのです。

夏休み明けに、Yさんの欠席が続きました。家庭訪問をすると、お父さんの具合が悪く入院されたので、お母さんと入院手続きをするために休んでいたのです。Yさんが入院の書類の内容を、お母さんにだいたい伝えて、手続きをしたということ、後で民生委員さんから聞きました。

9月の第2週目になって、やっと登校してきたYさんは、いつもと変わらない様子で、にこにこして組体操の練習に励んでいました。算数の時間は相変わらず、なかなか授業に参加できませんでした。その頃になると、私も問題の中の数字を、簡単なものに置き換えて考えるということを、Yさんのために少しずつ取り入れていたので、秋口には、発表できることもあり、学習に対して意欲的になってきました。

ある日、やはり放課後残して、九九の練習をしていると、

「私、九九練習あんまりしてないねん。お母さん病氣やったから。」

とポツリと話してくれたYさん。そういうえば、2年生の時の欠席日数がとても多かったことを思い出したのがその時でした。何

とかつて未熟な教師だったことよと、当時はかなり落ち込んだことを覚えています。

九九の時期に長期欠席すれば、うる覚えはあたりまえ。引き算や足し算も習熟するほど練習をしてきていなかったのですから、筆算の割り算なんて、できるはずがなかったのです。

ぼつぼつとさかのぼり指導が軌道にのってきた矢先の十一月。入院されていたお父さんが亡くなって、Yさんは転校していきましました。お母さんと2人で挨拶に来られて、「先生、Yに九九を教えてくださいありがとうございます。うごさいます。」

と、深々と礼をして帰って行かれました。

お父さんは結核だったのだそうです。生活保護を勧めていた民生委員さんが、書類作成はYさんがいないとできないから、手続きが遅れてしまったと、ため息をついておられました。

その後、お母さんと転々としたYさんの消息はわからなくなっていました。私とひと回りしか変わらない教え子ですから、今は四十八歳になっています。

この経験が、私に教えてくれたことは、

○さかのぼり指導の大切さ

○子どもの家庭環境を知ることの大切さ

○記録を取ることの大切さ

の3つです。学力を高めることは、人格形成につながることも、Yさんの学習意欲の高まりと、それを見る周りの子どもたちの変容を通して、実感することができました。

Yさんのおかげで、子どもを一面的に見ることをしなくなりました。音声言語の認識が弱いけれど、文字言語の認識は？視覚支援を入れたらどうなる？この書き方は図形認識が弱い？というように、細かく観察して記録する癖がついたのも、この年の経験のおかげです。

また、どの子ども機会が適切に与えられれば、必ず伸びていくことができるということも実感することができました。「子どもはランドセルに重い荷物を背負って登校してくるのだから、せめて教室の中では平等でありたい。」と、思えるようになりました。いつかYさんとお母さんに会うことができるのなら、このことを伝えることができるのに、世の中はうまくいかないものです。